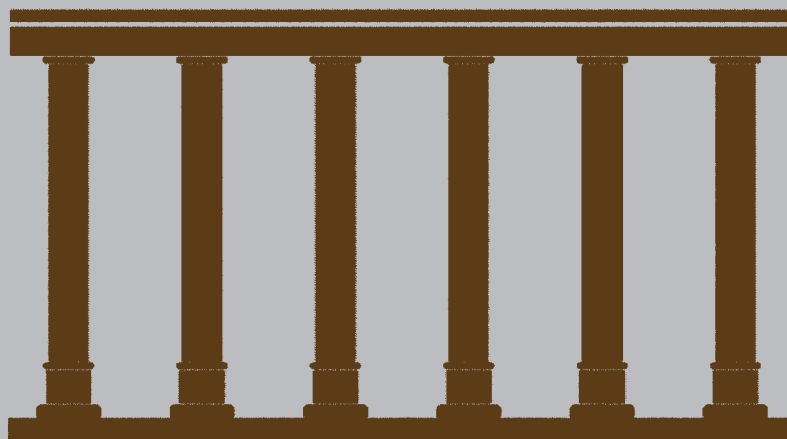


令和元年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

新中央図書館オープン25周年記念

# 「平成」新収 未公開貴重書展



KAGOSHIMA UNIVERSITY LIBRARY

鹿児島大学附属図書館

## 館長あいさつ

鹿児島大学附属図書館では、平成11年度から毎年、貴重書公開展を開催しております。本学は玉里文庫などの貴重書を蔵しておりますので、本学学術研究院法文教育学域の研究者及び図書館職員で構成する貴重書管理委員会を設置して、学内外へ公開する事業を企画運営してまいりました。本年度は、改元の年にあたり、丹羽謙治教授（法文学系）監修のもと、この30年間の新収蔵品を展示し、高津孝教授（法文学系）による記念講演会「薩摩の博物学」を行います。御来館の皆様、本学の新たな魅力を発見していただく機会となりましたら幸いです。最後になりましたが、本貴重書公開事業にあたり関係皆様のご尽力に心より御礼申し上げます。

令和元年11月

鹿児島大学附属図書館長 橋口 知

## 趣 旨

平成6年9月に現在の新中央図書館の第一期工事が竣工し、オープンから25年が経った。この間、教員の個人研究費、外部資金（科研費）、あるいは学長裁量経費により、江戸時代～近代の貴重な書籍・古文書が多数購入され図書館に収蔵されてきた。また、寄贈によっても貴重な資料は増加が続いている（木脇家文書、大武コレクション等）。貴重書公開展として21回を迎える今年度\*は、「平成」時代に収蔵された未公開の書籍・古文書から資料価値が高いものを選定し、これらに新たに光を当てるとともに、鹿児島大学が継続して資料を収集・保存・公開している姿を内外に知らせることを目的として企画した次第である。

\* 会期 令和元年11月7日～12月12日

## 目 次

### 儒学

漢学紀源／伊地知季安 .....1

### 本草学

春の七くさ .....2

人參識／曾槃 .....2

日本百花写真図 .....3

琉球博物語彙 .....3

### 軍記・考証

薩摩朝鮮軍記 .....4

忠久君年表・比企氏系図・忠久君事蹟・

丹後局履歴・惟宗氏系図 .....4

### 古文書（寺院）

不断光院文書 .....5

### 古文書（幕末・明治）

子爵黒田家文書／黒田清綱 .....6

戊辰戦争関係資料 .....7

東北風談 .....8

### 加治木

新納氏家譜 下書 .....9

島津齊宣書簡（写） .....9

瓊山文稿 .....10

### 種子島

懷中島記 .....10

政事上の放逐人 千里風煙 .....11

維新豪傑談／西村天囚 .....11

### 書道

岳飛弔古戰場文 .....12

長崎義護書巻 .....12

### 地図

錦江湾沿岸図（桜嶋近郊絵図） .....13

朝鮮国之図（高麗国之図） .....13

は人物紹介

# 儒学

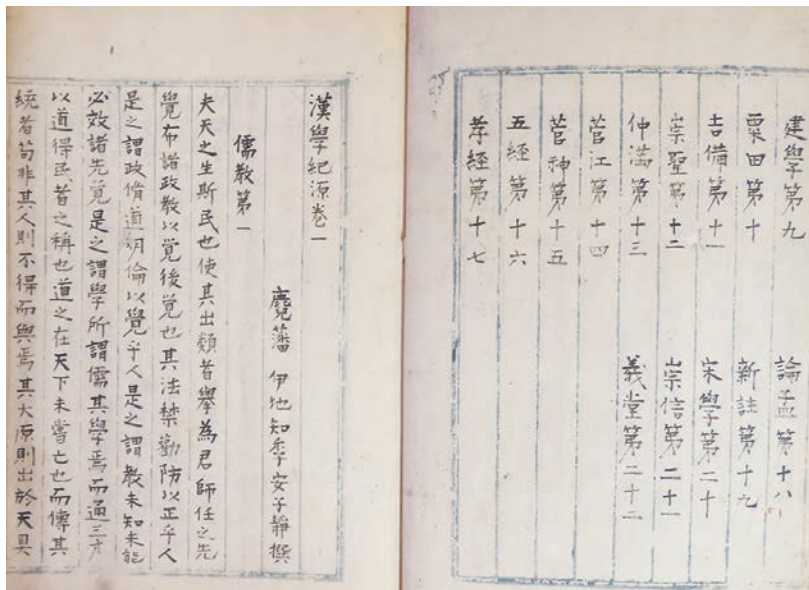
## 漢学紀源 伊地知季安自筆本(半紙本 3 冊)、木脇藤次郎写本(原稿用箋 3 冊)

本書は、江戸時代後期の薩摩藩士、伊地知季安(1782-1867)により天保11年(1840)頃にまとめられた。書名中の「漢学」とは本書に於いては専ら「儒学」を言い、また「紀源」とは「源を紀す」の意味である。その名のとおりに、我が国の儒学について、その伝来の始めから江戸時代初頭に至るまでの各時代の状況を記述した、日本儒学史とも言えるべき書物である。本書は、季安より献呈を受けた江戸後期の大儒、佐藤一斎(1772-1859)に高く評価されたほか、明治期に本格化した日本儒学史研究に於いても季安の所説が取り込まれたあとを確認することができる。

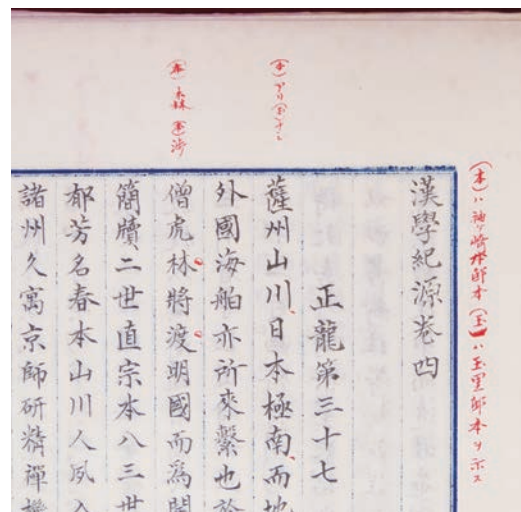
鹿児島大学附属図書館には本書の写本3種が所蔵され、玉里島津家旧蔵の1種(4巻3冊、玉里文庫本)を除く2種が平成の新収書にあたる。

このうち、まず取り上げるべきは、著者伊地知季安の自筆本(3巻3冊)である。巻2のみ親交のあった陽明学者、伊東祐之(1816-1868)の筆写によるが、著者季安の点検を経ていることが同巻末尾の識語によって確認できる。現存する『漢学紀源』諸本のまさに源流に位置する1本であり、学術上極めて高い価値を有する。

もう1種は、玉里島津家の書籍(玉里文庫)の維持管理に大きな役割を果たした木脇藤次郎(1859-1932)による写本(5巻3冊)である。各冊末尾ほかの識語等に依れば、昭和3年(1928)10月から翌4年(1929)7月にかけて書写された木脇による定本漢学紀源と目される。「東京袖ヶ崎公爵島津家編輯所蔵本」(現在、東京大学史料編纂所に所蔵)、「玉里邸本」(上述の玉里文庫本)、「薩藩叢書本」等を用いた校訂の成果を確認できる。『漢学紀源』研究に裨益する一本と言えべきであり、近代鹿児島の知識人による知的営為を伝える貴重な資料とも言える。(大淵)



『漢学紀源』(伊地知季安自筆本)



『漢学紀源』(木脇藤次郎写本)

### 伊地知季安(1782-1867)

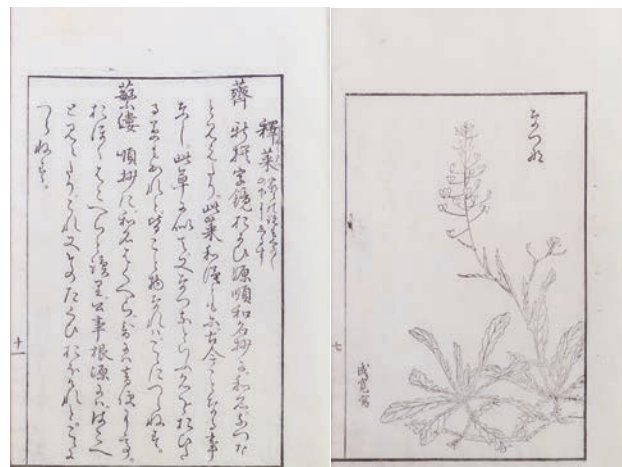
薩摩藩士。本姓は伊勢氏。初名を季彬(すゑひで)と言い、字は子静(あざな しせい)、号は潜隠(ごう せんいん)。薩摩藩に関する資料の集大成である『薩藩旧記雑録』を編纂するなど、今日、歴史家としてその名が知られる。27歳の折、近世薩摩藩政史上最大の政変とされる文化朋党事件(近思録崩れ、秩父崩れ)に連座し、以来およそ40年にわたる禁錮に見舞われた。この間、資料収集や文献の精読及び考証に力を尽くし、数々の著作を産み出すに至った。『漢学紀源』もまたその一つである。(大淵)



# 本草学

## 春の七くさ 寛政12年(1800)刊 大本1冊

曾槃<sup>そうはん</sup>撰。「春の七くさ」についての図入り解説書。本書は、巻末に付された曾槃の門人安田静の跋文によると、寛政10年戊午(1798)の夏に、曾槃の著作を曝書していた折に、安田静が「七種菜考」の原稿を見つけ、自分用に書写し、秋になって曾槃に訂正を依頼し、自分の蔵書としていた。その後、寛政12年庚申(1800)の秋9月に、書肆より刊行した。本文は、七草の異同を考証した「原始」に始まり、その後、なずな、はこべら、せり、すずな、御形(ゴギョウ)、すずしろ、佛の坐(ホトケノザ)の図を掲げ、次に「釈菜」として、それぞれについての考証が付

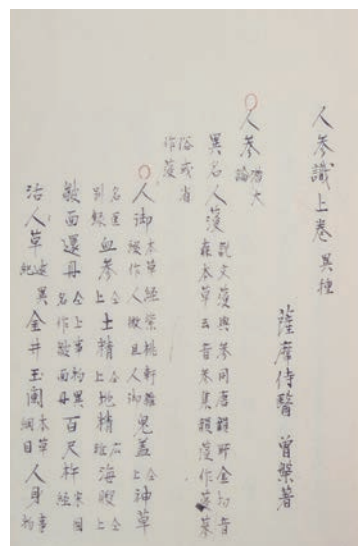


『春の七くさ』なずな図及び説明

されている。絵図は、ゴギョウのみが谷山洞龍の絵で、他は成寛の絵となる。井上良吉編『薩藩画人伝備考』(大正4年)によれば、谷山洞龍(? - 1811)は、名は美清、狩野洞春(美信、1747-1797)に絵を学び、初め探楽と号した。のち画業で大進法橋<sup>ほつきょう</sup>に叙せられ、曾槃の参画した農業百科全書『成形図説』の絵図は彼が描いたという。成寛については未詳。掲載図は「なずな」で、曾槃の解説は「薺[なずな]『新撰字鏡』および源順『和名抄』に、和名、なつなと見えたり。此菜和漢ともに、古今ことなる事なし。此草に似て、又なつなといふ名をおひたる草もあれと、皆こと物なれハ、ここにつらねす。」とする。(高津)

## 人じんしき 人參識

写本 大本2冊



『人參識』上巻・巻頭

曾槃<sup>そうはん</sup>撰。和名オタネニンジン(朝鮮人参、高麗人参、薬用人参)についての解説書、上下二巻。名称についての考証を中心とする。上巻では、「人参」名称の考証に始まり、異国産人参の名称「遼東人参、上党人参、朝鮮人参、西洋参、竹節参、孩児参、珠参、清河参、粉参、泰山参、土人参、生玉参、福参、团参、参蘆、参葉」について述べ、鑑定、収蔵、古今産地を記述する。下巻は、日本産人参の名称「竹節人参、単股人参、蝌蚪人参、種参、参葉」について述べ、古今産地を記述する。オタネニンジンの根の部分<sup>にんじん</sup>を「人参」と称し、漢方では紀元前より重要な薬剤として珍重された。沿海州、中国東北部、朝鮮半島に野生種が分布する。日本では極めて高価な輸入薬剤であったが、1730年代にその栽培に成功し、江戸幕府が各藩に種子を分与したので、御種人参<sup>おたねにんじん</sup>の名称が生まれた。(高津)

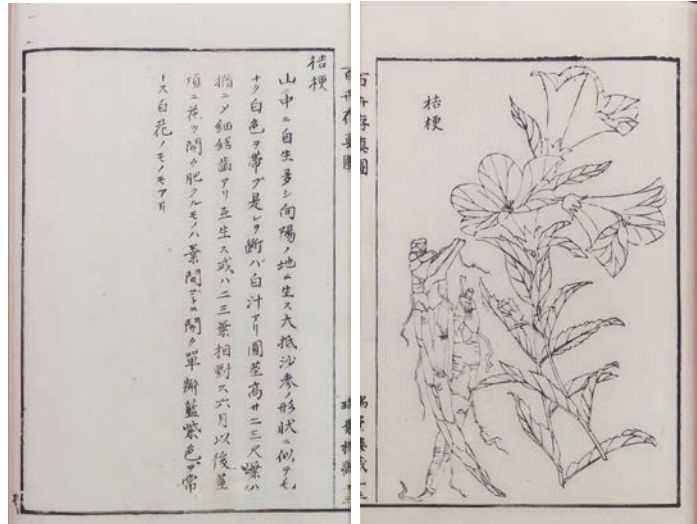
曾槃<sup>そうはん</sup> (1758-1834)

江戸後期の本草学者、博物学者。帰化明人の子孫。名は槃<sup>しょうけい</sup>、昌啓、永年、字は子攷、号は占春<sup>せんしゅん</sup>。父は、庄内<sup>しょうない</sup>(鶴岡)藩医。江戸に生まれ、庄内藩に仕える。本草学者・田村藍水<sup>らんすい</sup>に学び、寛政4年(1792)薩摩藩主島津重豪<sup>しまづしげひで</sup>に仕え、重豪の命で農業百科全書『成形図説』30巻(1804刊)を編纂した。本草学、蝦夷資料、和歌著作など少なくとも60数点の著作がある。博識な考証学者で、考証、注釈に優れるが、臨床研究、実地調査の面は少ない。(高津)

## に ほんひゃっかしやしん ず 日本百花写真図

天保2年(1831)  
大本1冊

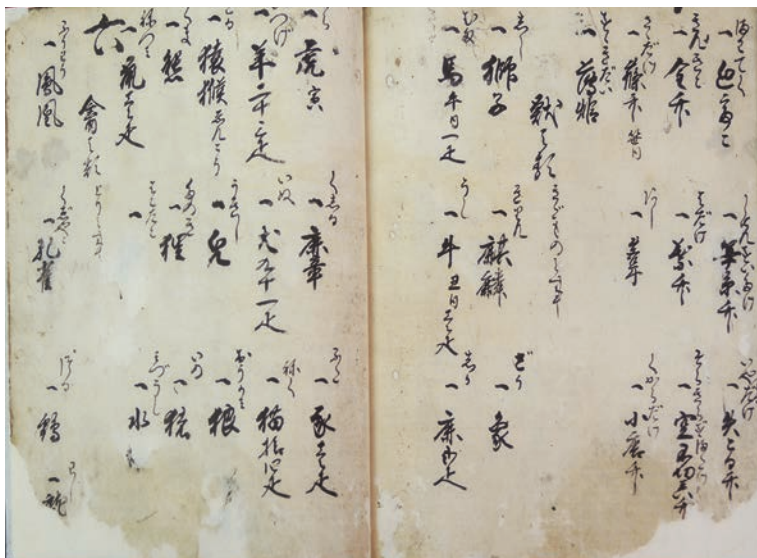
さかもとふくげん  
坂本復元撰。薬用植物についての精密な図版と解説。刷り題籤「日本百花写真図」、序文題・版心題「百卉存真圖」。序文1丁、本文28丁。各丁表に植物図、裏に説明がなされる。図版は28図。人参、甘草、知母、黄芩、川芎、徐長卿、黄精、防風、沙参、防己、使君子、藜蘆、桔梗、香附子、劉寄奴、地榆、貝母、牛膝、升麻、柴胡、荊三稜、土茯苓、菊、黄耆、澤瀉、龍膽、竹節、人参、賽三七である。江戸時代後期の著名な本草学者・曾槩の序文(天保二年五月、1831)には、本書の著者が、坂本復元(1800-1853)、号は永斎、摂津高槻藩に仕える侍医であることを記す。坂本復元は幼少より、本草学の書物を読み、草木を栽培し、真贋の鑑別に励み、有用な植物について精緻な図譜を作成しそれを刊行したのが本書で、医家を裨益する著作であるとする。(高津)



『日本百花写真図』桔梗図と説明

## りゅうきゅうはくぶつごい 琉球博物語彙

琉球写本 大本1冊



『琉球博物語彙』獣之類

意味分類に基づく琉球王国時代の漢語語彙集である。類書に京都大学文学部所蔵『琉球資料』中の「節用集 残欠」(改裝題籤)があり、池宮正治氏による翻字では「琉球節用集」(写本1冊、26丁、総語彙数約1570語)とする(『那覇市史 資料篇』第1巻11・琉球資料(下)、1991年)。また、「久米島文書」(久米島博物館(沖縄県島尻郡久米島町)に寄託)中にも、京大本の異本の存在が報告されている。高橋忠彦・高橋久子編『琉球和名集—影印・翻字・索引・研究—』(東京学芸大学古辞書研究会、2008

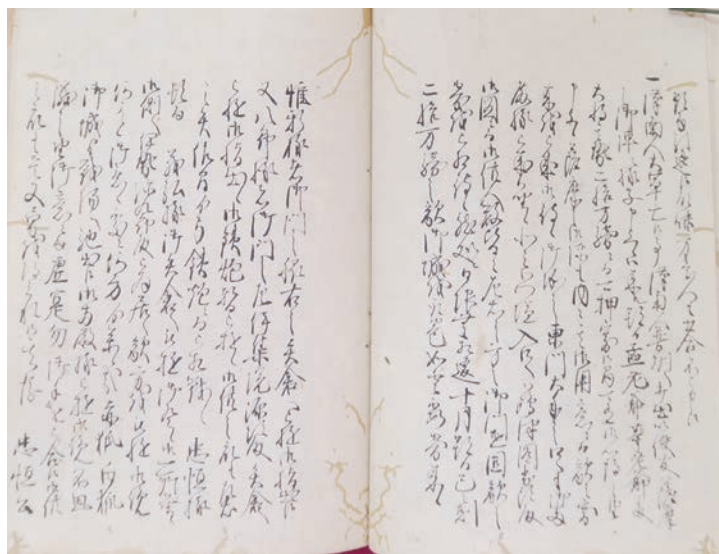
年)では、いろは配列を原則とする日本中世の『節用集』とは異なる意味分類の漢語語彙集であることから、『琉球和名集』という名称を提唱している。本書は、意味分類による琉球語漢語語彙集で、ひらがなによる傍訓を付するが、京大本、久米島本とは形式、配列、内容を異にする。京大本の分類は「食物之名、五穀、酒之名、野菜之名並草之名、木之名、竹之名、煙草之名、茶之名、書物之名、五行、四方、四節、十幹、十二支、二十四節、五節供、月之異名、日之異名、吉日之異名、月之一字異名、玉之名、油之名、絵之名、船之名、衣類、人倫、十惡、旅之御使者、五常、四民、諸細工、畜類並変物、六畜、鳥之名、魚之名」である。本書は残念なことに破損著しく、書名を含む全体像は不明である。分類は、「諸野菜之類、木之類、竹之類名、獣之類、禽之類、魚類、虫之類、茶具之類、酒具之[類]、あんどん多葉[粉之類]、筵之[類]、卓道具之類」が残存する。(高津)



# 軍記・考証

## 薩摩朝鮮軍記 写本 大本 1冊

内題「朝鮮軍覚書」。慶長の役における島津勢の奮闘ぶりを淵辺量(良とも)右衛門元真が覚書の形で記したもの。『島津家高麗軍秘録』(『続群書類従』第20輯下所収)、『淵辺量右衛門朝鮮陣覚書』(玉里文庫蔵『諸旧記』所収)、『淵辺良右衛門覚書』(木脇家文書)等、異称が多い。作者の淵辺量右衛門は父平内左衛門元秋と親子二代にわたって島津義弘に仕えた人物。



『薩摩朝鮮軍記』

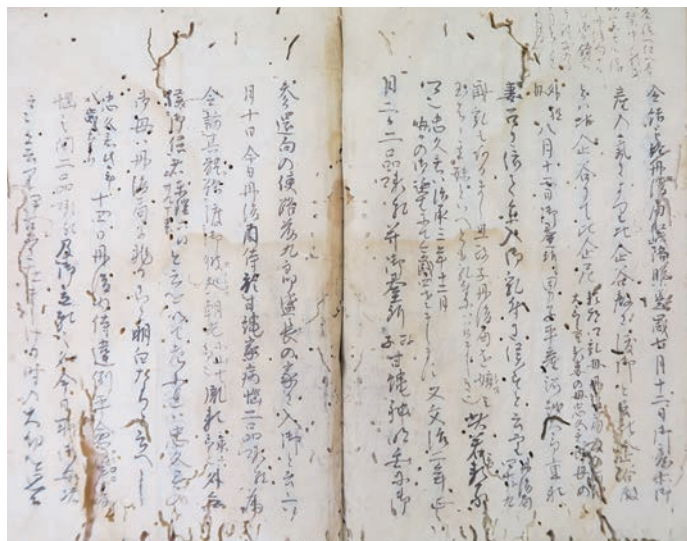
図は慶長3年(1598)10月1日に行われた泗川<sup>しせん</sup>の戦いの際に城から戦場に走り

出てきた赤狐と白狐を「御両殿様(義弘・忠恒父子)」が目撃、これを奇瑞として「御供之衆」は勇を得たという逸話を記した部分。島津勢はこの戦いで数に勝る明・朝鮮連合軍に対して激戦の末に大勝利を収め、「鬼島津」の名を轟かせた。島津氏初代忠久は源頼朝の寵愛を受けた丹後局が正妻である北条政子の嫉妬から逃れる旅の途中で急に産気づき、住吉神社の籬の傍らの石の上で狐火に照らされながら生んだ子であるという出生譚があることから、稲荷神とその使いである狐は島津氏と深い縁があると認識されており、以降このエピソードは泗川の戦いでの島津の勝利を彩る重要な要素として長く語り継がれていくのである。(内山)

## 忠久君年表・<sup>ひき</sup>比企氏系図・<sup>たんごのつぼね</sup>忠久君事蹟・<sup>これむね</sup>丹後局履歴・惟宗氏系図

写本 半紙本 1冊 (木脇家文書)

本書は、江戸時代後期の有職故実家であり歴史考証家でもあった栗原信充(柳庵)<sup>くりはらのふみつ</sup>による島津家初代島津忠久と丹後局に関する年表・考証および<sup>たんごのつぼね</sup>比企氏、<sup>ひき</sup>忠久君事蹟、<sup>これむね</sup>丹後局履歴、<sup>これむね</sup>惟宗氏系図をまとめて筆写したものである。筆写者は<sup>きのわきけいしろう</sup>木脇啓四郎(祐尚)<sup>すけなお</sup>で木脇は栗原信充の弟子。文久3年(1863)島津久光が栗原信充を鹿児島に招聘、その講義を受けるとともに、栗原の著作『令講義』<sup>りょうのこうぎ</sup>『職原鈔私記』<sup>しよくげんしょうしき</sup>を出版することを依頼した。識語によれば元治元年(1864)4月5日、栗原の江戸への帰途、大坂江戸堀の旅宿で写したものである。中世以来、島津忠久の誕生をめぐっては前項にあるような霊験譚が流布してきた。栗原は比企氏ゆかりの寺院の資料などから、頼朝に愛されたのが丹後局ではなくその娘であると結論づけている。(丹羽)



『丹後局履歴』



# 古文書(寺院)

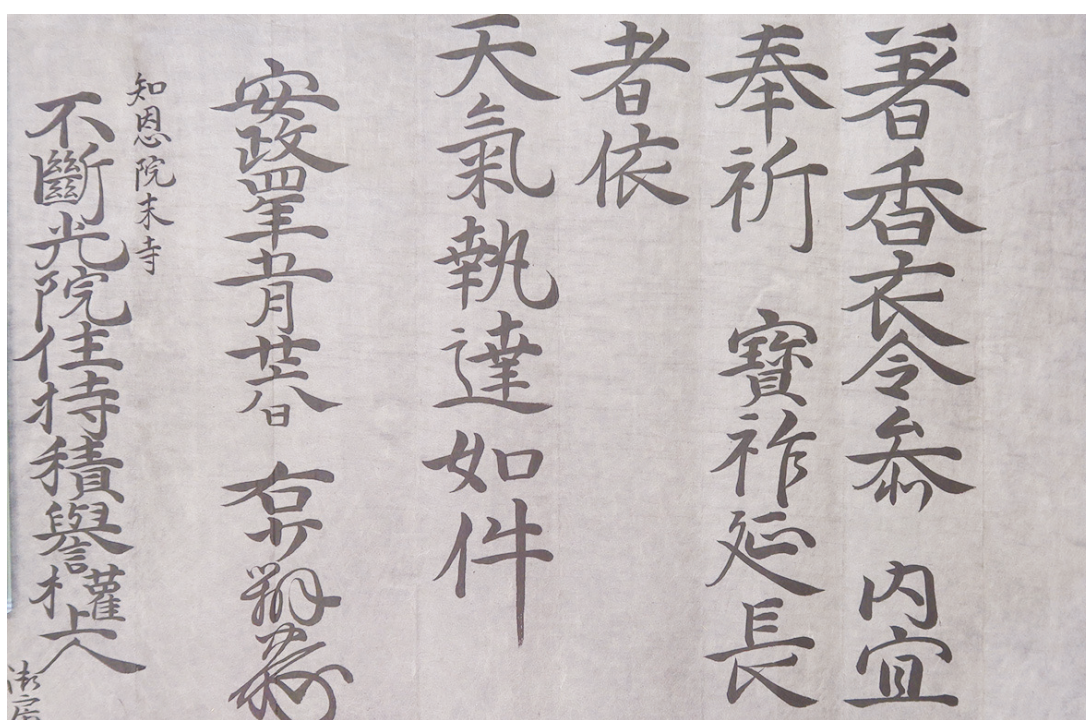
## 不断光院文書

薩摩国養泉山無量寺不断光院は、京都にある浄土宗総本山知恩院の末寺であり、永禄5年（1562）鹿児島市の坂本村（鹿児島市長田町にある南風病院付近）に、京都の不断光院の住持であった清誉上人を開山として創建された。薩英戦争のときに砲撃を受けて焼失したのち廃仏毀釈に遭い、その後鹿児島の易居町に寺地が移転して現在に至る。廃仏毀釈が激しかったために鹿児島に残存する寺院史料は極めて少ない、とはよく言われることだが、不断光院もその院内にあった史料群の存在は知られていなかった。

そうした中、幕末に薩州不断光院の住持だった積誉善澄という僧侶が手元に保管していたとみられる十数点の文書が、鹿児島大学附属図書館に収蔵されることになった。桐紋や葵紋の付いた文箱に収められているその文書の中には、積誉が正式に浄土宗の宗脈・戒脈を相承したことを証明する書類が多数含まれている。中でも、朱で左右の手印が押された璽書（教えの真髓を信頼する門人に伝えて教えの広布を願うこと。その弘通を許された者に与えられた手次状も璽書と呼ばれている）が目を引く。積誉にそれらの証明書を与えているのは、江戸の幡随意院（幡随院）第四十一世の法誉在融である。積誉は、浄土宗僧侶を養成する関東十八檀林の一つ幡随院で修学したことが分かる。積誉は孝明天皇から香衣を許されるほどの高僧となったが、その香衣勅許の綸旨（天皇の意を蔵人や側近がうけたまわって出す文書）は、宿紙と呼ばれる薄墨色の紙に記されている。（金井）



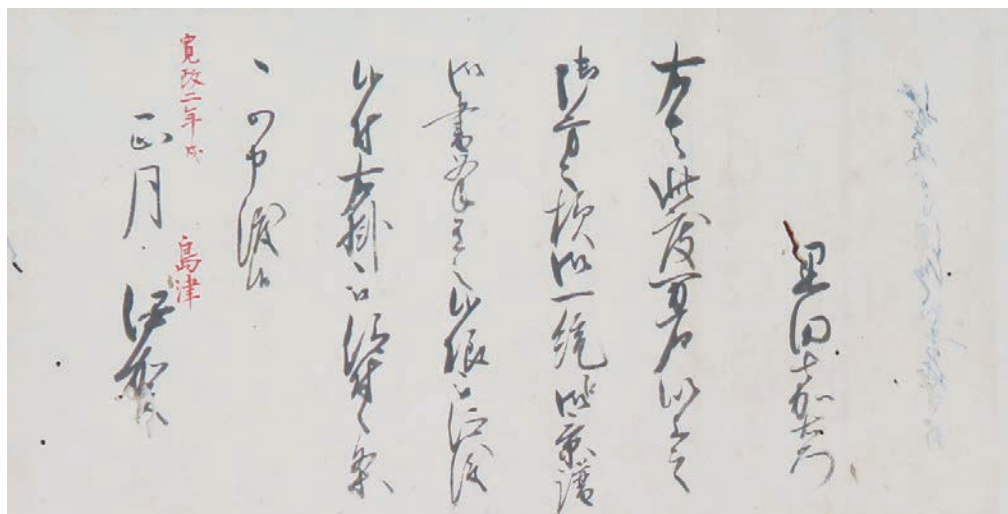
文箱（左）と綸旨の包紙



「孝明天皇綸旨」

# 古文書(幕末・明治)

子爵黒田家文書 卷子本 8巻



黒田家文書（黒田清躬に御系譜の書き挙げを命ずる文書）

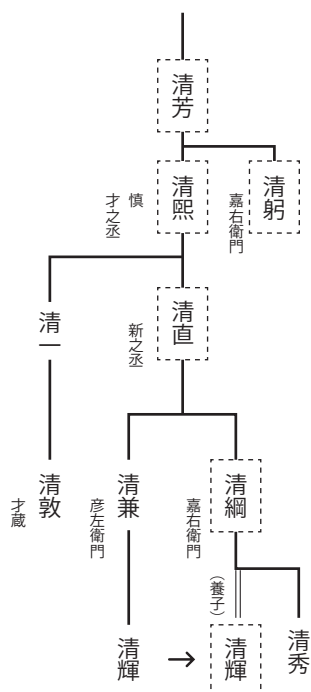
本文書は、近世後期、薩摩藩の記録所に関わった黒田家の文書である。外題にそれぞれ「文書」（三巻）、「古文書」（三巻）、「伝家文書」（二巻）とある卷子本計八巻から成る。中心となるのは黒田清躬・

清熙・清直・清綱の四人に関わるもので、黒田家および記録所にかかる一次資料として価値が高い。

「古文書」の第一巻は江戸時代の黒田家に伝わる家の記録類を貼付して仕立てたもので、黒田家の略系図や持ち高の記録、辞令類が時代順に並ぶ。第二巻は、清躬の記録奉行としての活動の記録。図版は寛政2年（1790）正月、清躬が幕府の推進した万石以上の大名家の家譜（いわゆる「かんせいちょうしゅうしょかふ寛政重修諸家譜」）編纂の担当を命じられた時の辞令。このほか、造士館教授の山本正誼の「島津世譜」改訂の補佐係を命じられた記録、島津雄五郎（島津忠厚、重豪三男、後に今和泉家に養子に入る）の「書物相手」、重豪の小納戸頭取と重豪の四男の時之条（後、越前丸岡藩有馬家に養子に入る。有馬久昵）の抱守などを命じられた際の記録を収録する。第三巻は清熙と清直の辞令類。清熙は兄清躬の跡を継ぎ、記録所に勤務、造士館教授、用人格、帖佐地頭を歴任。その子の清直も記録方見習、同添役を経て記録奉行となっている。「文書」（全三巻）は、桂園派の歌人として名高い清綱の若年からの辞令類を収める。

「伝家文書」二巻には大正元年から5年にわたって、清綱が大正天皇、皇后、昭憲皇太后からの諸品の拝領した時の記録を収める。この時期、清綱は宮内省御用掛として仕えており、大正4年（1915）、即位式が行われた京都からの土産として銅製花生などを拝領している。（丹羽）

## 黒田家略系図



### 黒田清綱（1830-1917）

薩摩藩士。記録奉行を務めた黒田新之丞清直（1805-1842）の長子。通称、新太郎。幕末期国事に奔走、慶応2年（1866）、太宰府に移った五人の勤皇公卿の身柄を大坂に移すべく幕府目付小林甚六が下向した際、清綱は藩命により砲隊を率い威嚇してこれを阻止した。戊辰戦争では山陰道鎮撫総督参謀として従軍する。維新後は弾正少弼、東京府参事、教部少輔、文部少輔などを歴任、明治8年（1875）に元老院議官、同20年華族（子爵）、同33年枢密顧問官となる。和歌は桂園派の八田知紀門。高崎正風とともに天皇・皇后らの和歌の指導にあたり、瀧園社を起こし多くの弟子を指導する。清綱のあと家督を継いだ甥の清輝は西洋画家として有名。（丹羽）



## 戊辰戦争関係資料

本資料は、大隅国桑原郡栗野郷土の内丸休太夫藤原篤実（当時28歳）が記したものである。慶応3年（1867）2月28日から慶応4年6月4日までの、城下学寮での様子、調練を経て京・大坂での駐留の様子、やがて戊辰戦争に従軍するまでの約15か月間を記録した私的な日記原本と、関連留帳、手記稿本、後代の内丸家記録など21点がある。

### ①「文武番兵諸日記」慶応3年3月3日～8月11日

「此節上京諸往来道中船中日記」

慶応3年8月12日～10月25日

「此節入京諸往来着至日記」慶応3年10月26日～12月晦日

「在京番兵留日記」慶応4年正月元日～正月7日

「二度摂州大坂表下暇日記」慶応4年正月8日～6月4日

以上の日記5冊を合綴。内丸は、城下にむけて郷里を発つ日に起筆し、城下学寮での調練の様子、薩摩藩が保有した木造帆船の軍艦（輸送艦）翔鳳丸での上京の様子、京・大坂での駐屯巡邏の様子、鳥羽・伏見の戦火や混乱の様子など、日々の暮らしぶりや町の様子までを連日詳細に記載している。

### ②「文武番兵学寮詰諸取入記」慶応3年3月朔日～8月12日

「此節上京被仰付中余方如取入帳」

慶応3年8月12日～10月25日

「此節入京被仰付候ニ附諸品取入帳」

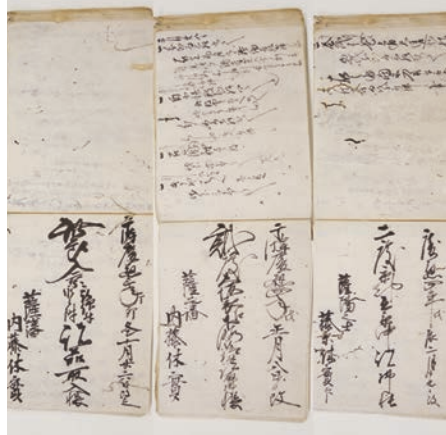
慶応3年10月26日～12月27日

「式度大坂表江下暇被仰付諸取払帳」

慶応4年正月8日～2月5日

「二度京都在京中諸払帳」慶応4年2月19日～2月晦日

以上の5冊を合綴。鹿児島城下、京、道中の長崎や大坂での購入記録。傘や鬘附、灯油、蒲団などの日用雑貨や、羽織や下着などの衣類、黒砂糖、菓子などの食品、ぜんざい、酒肴などの外食、湯屋料、馬乗賃、京都大坂絵図、住吉大社守札、書籍、兵具類まで、それぞれ場所、日付、価格、なかには購入店も記している。当時の物価や暮らしぶり、内丸の関心を知ることができる。

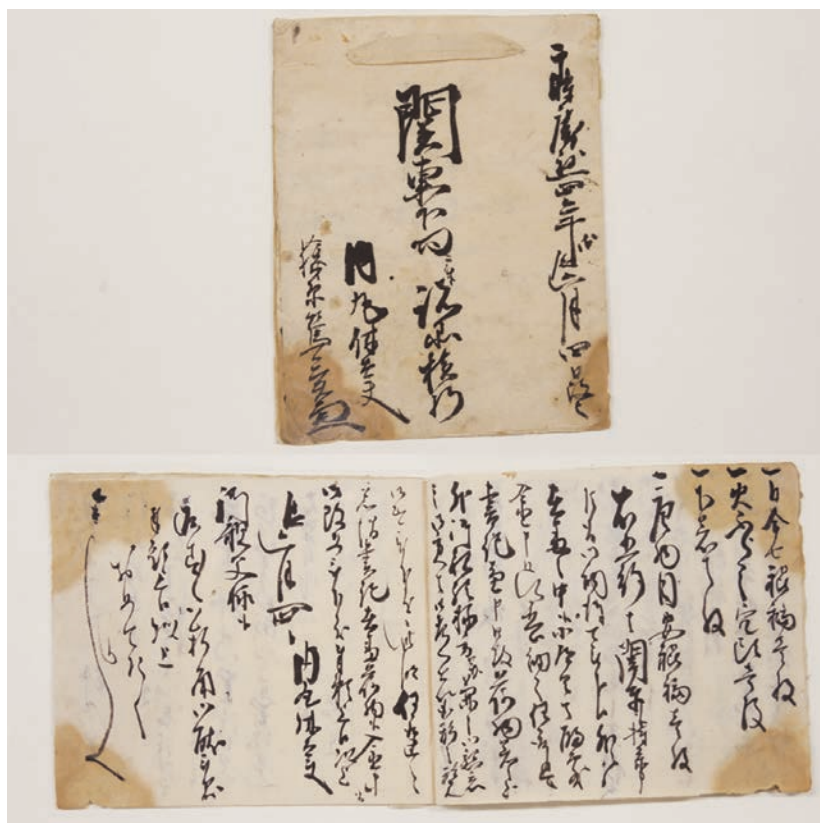


### ③「関東下向ニ付諸品横折」

慶応4年6月4日

内丸が長崎や京・大坂で家族や親類、親しい人のために買い求めた品が記されている。贈り先に対する細やかな心配りの様子をうかがうことができる。

この史料は、末に父親に宛てた文があることから、関東へ下向する直前に郷里に送った品物の覚書といえる。そのなかに、「日記帳并書状袋并諸品出来覚付袋」と見え、今回紹介した史料①・②・③はこのときに一緒に送り返したもののといえる。(佐藤)



### とうほくふうだん 東北風談

きもつきかねたけ

肝付兼武著 写本

1軸

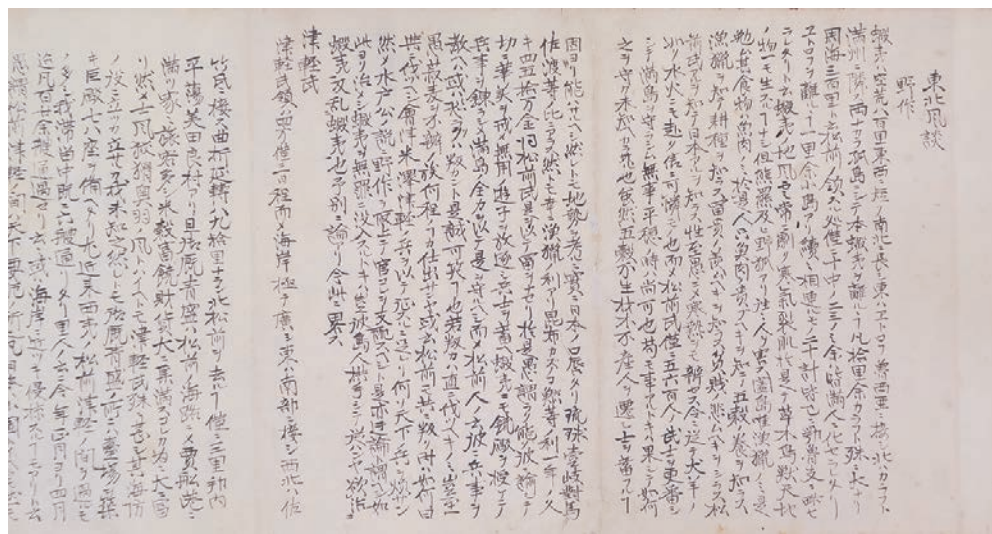
嘉永3年(1850)頃成立か。26.1cm × 388.0cm

本書は薩摩藩士肝付兼武が蝦夷・アイヌ・東北を実際に巡り、各藩の面積や風土、農産物・産業などを詳細に報告・分析した地誌である。単なる地誌ではなく、そこに暮らす領民・武士の気質や生活ぶり

を観察し、時に藩主の施政や人格まで評している。例えば、上杉氏の米沢藩を「天下富国の国」と称える一方で、加賀藩は「頗る大藩の風ありといへども、畢竟恐るるに足らざる也」と断ずるなど手厳しい。

また兼武は兵学を旨とする儒者で、嘉永年間という、ペリー来航前後の不安定な情勢を反映してか、その興味は海防に向かっており、東北諸藩の海防未整備・無頓着を批判している。文中に「余（私）、別に海防論あり」とあり、『海防手引草』（蓬左文庫所蔵）なる兼武の著作がこれにあたると考えてよいだろう。

なお、息子の兼行は父の海防論を引き継いだか、北海道開拓使において測量分野で活躍し、のち海軍水路部測量部長となり、海軍大学校長を務めた。(亀井)



『東北風談』冒頭部



# 加治木

にいろしかふ

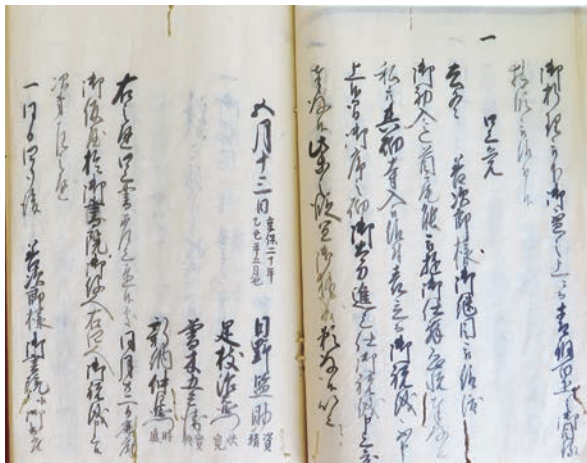
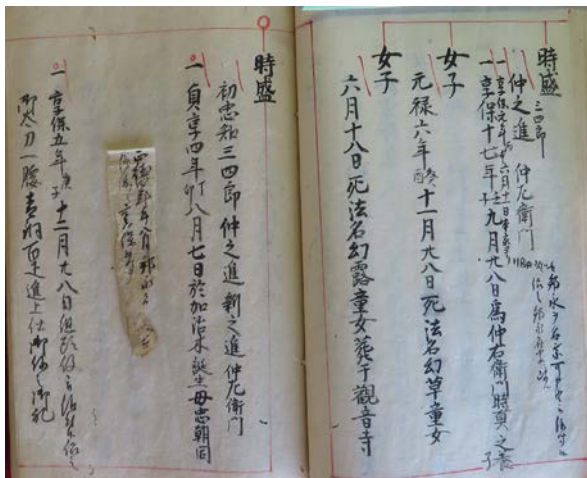
## 新納氏家譜 下書

写本 1冊 (新納家文書)

加治木島津家家老をつとめた新納氏に伝来した文書の中に含まれる家譜の下書。

新納氏家譜下書は、和綴の冊子1冊であり、江戸初期の当主忠雄の子女から記載が始まり、生没年や嫁ぎ先、法名、通称、事績、関係文書等が記載され、当主の名前の上に朱の○が付けられている。新納氏家譜下書に記載されている事績の下限は明和七年(1770)であり、家譜の記載も当該期当主時員の子女で終わっている。新納氏家譜下書が書かれた時期は、明和七年以降間もない時期であったと考えられる。

写真は、新納氏家譜時盛項と享保二十年(1735)五月十三日付新納仲左衛門時盛他三名連署口上覚部分である。享保十四年薩摩藩主島津継豊次男善次郎(後の薩摩藩主島津重年)は1歳で加治木島津家当主島津久季の養子になり、同十九年養父死去により、翌年僅か7歳で加治木島津家当主となった。同口上覚は、新納時盛が他の家臣達とともに善次郎を補佐し加治木島津家の家政を担っていることを示している。(日隈)



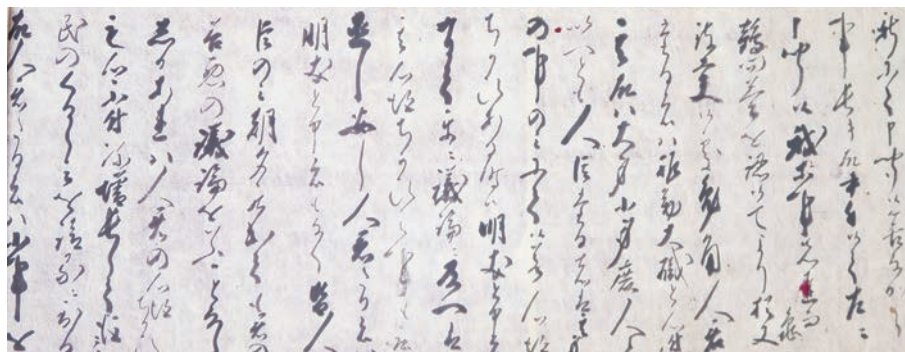
『新納氏家譜』

しまづ なるのぶ

## 島津齊宣書簡 (写)

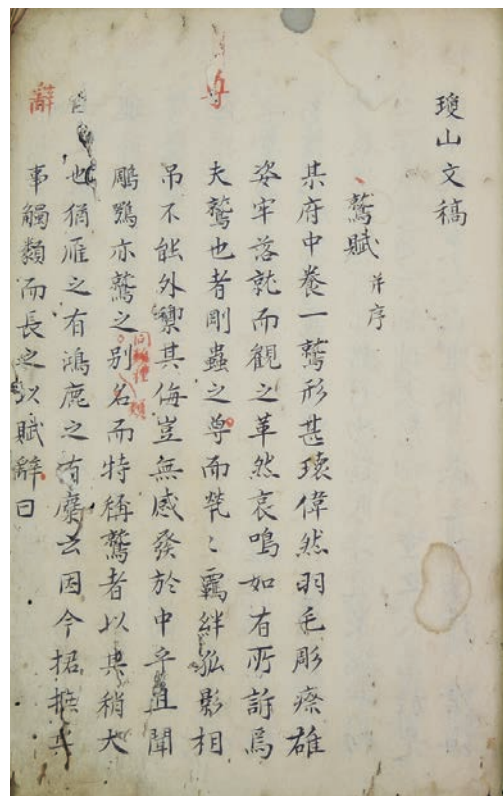
継紙 17.0cm × 218.0cm (新納家文書)

本書簡には差出人も宛名もないが、文中に「我等事、先達而亀鶴問答を認候てより……」とあることから、文化2年(1805)に「亀鶴問答」を著した薩摩藩9代藩主島津齊宣の書簡であると推定できる。ただし、差出人、受取人の名がないことから写しであろう。「亀鶴問答」は質素儉約を旨とする仁政に向かうことを問答形式で家臣に教え諭すもの。同書だけでは不足と感じた齊宣は、本書で「人君のよき事ハ申上る者多く、あしき所ハ申者少し、<sup>これ</sup>是人君の第一の毒にて候。よき事のみ聞時は猶驕慢つりのり放心ニ至る」ので、家臣たちが主君の欠点を遠慮せず指摘し諫言することを望んでいる。また「我等不徳の所より右ニ成立候へハ近年中ニハ本之通ニ取直し<sup>もとのとおり</sup>不申候てハ叶はぬ事ニ而候」と民の苦しみは自分の責任であり、改革を我が身に代えても推進しようとする覚悟を伝えている。齊宣の改革は、父重豪の積極的な開化政策と真っ向から対立するものであり、重豪の怒りを買って御家騒動(文化朋党事件、秩父崩れ、近思録崩れとも)に発展、結果齊宣は隠居を余儀なくされる。(丹羽)



「島津齊宣書簡写」冒頭部

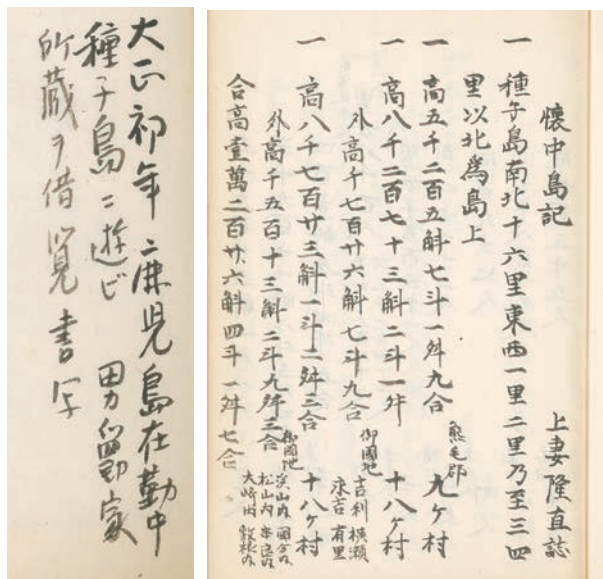
『瓊山文稿』二巻は、江戸時代の薩摩の儒者・伊藤瓊山<sup>いとうけいざん</sup> (1752-1823) の文集である。原本は本来2冊であったものを1冊に合冊してあるが、最初の1冊が墓誌銘に始まり書簡が続く形式、2冊目が賦<sup>ふ</sup>に始まり序、伝、論、説、記と続く形式となっており、漢文文集の一般的形式に照らして元来第二冊目が最初で、合冊の際に前後が入れ替わったものと推定される。重野安繹<sup>しげのやすつぐ</sup>「伊藤瓊山先生墓表」(『成斎文初集』巻三)によれば、伊藤瓊山、名は世肅<sup>せいしゆく</sup>、字は敬夫<sup>けいふ</sup>、父の伊藤隆景は筑前の人であったが、長崎に住まいした。瓊山は、長崎の古名「瓊浦」に基づく。幼少より各地に遊学し、京都の江村北海<sup>えむらほっかい</sup> (1716-1783)、龍草廬<sup>りゅうそうろう</sup> (1714-1792)、浪速の中井竹山<sup>なかいちくざん</sup> (1730-1804)、関東の岡野子玄<sup>おかのしげん</sup>、熊坂台州<sup>くまかたいしゅう</sup> (1739-1803)、鎮西の亀井南冥<sup>かめいなんめい</sup> (1743-1814)、薮孤山<sup>やぶこざん</sup> (1735-1802) と交友した。24歳で加治木島津家の島津久徴<sup>ひさなる</sup> (1752-1809、号は錦水<sup>きんすい</sup>) に招かれ、錦水の子弟の教育および郷校毓英館での指導に当たり、晩年には本府の鹿児島で人材の育成を行った。詩は唐代、明代を尊重し格調高く、晩年は宋代の蘇軾<sup>そしやく</sup>、陸游<sup>りくゆう</sup>を学び、次第に自在なものとなった。文章は明代の後七子の李攀竜<sup>こしちし</sup>、王世貞<sup>りはんりょう</sup>の擬古主義、復古主義的文学に習い、絢爛豪華なものであった。また、島津錦水の詩集『名山楼詩集』(寛政11年(1799)刊)の校訂を担当した。(高津)



『瓊山文稿』上巻・巻頭

## 種子島

17世紀から18世紀初頭にかけての種子島の歴史・地理に関する事柄を簡潔かつ網羅的にまとめた漢文体の地誌。種子島家の家老を務めた上妻隆直<sup>こうづまたかなお</sup>の編著で元禄2年(1689)成立。原本は西之表市立図書館にある(『鹿児島県の地名』、平凡社)というが未見。鹿児島大学附属図書館には旧鹿児島高等農林学校教授の小出満二<sup>こいでまんじ</sup> (1879-1955) が大正6年(1917)10月に種子島に赴き、豊山文庫本を謄写した本が伝わる。近年沖縄の古書店から購入した本(図版)も、「大正初年鹿児島在勤中／種子島ニ遊び 男爵家／所蔵ヲ借覧書写」という識語の内容と筆跡から小出が自写し製本した本と推定される。(丹羽)

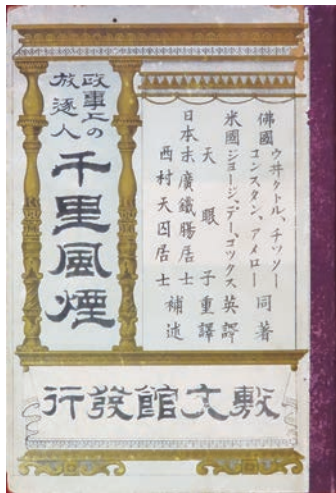


『懷中島記』冒頭(右)と識語(左)



## 政事上の放逐人 千里風煙 四六判 1冊

ヴィクトル・チツソー、コンスタン・アメロー同著、ジョージ・デー・コックス英訳、鈴木天眼重訳、末広鉄腸・西村天囚補述



『千里風煙』表紙

明治21年(1888)刊。鈴木天眼が、Victor Tissot と Constant Améro の共著にかかる *Aventures de trois fugitifs* (1881) を英訳 (The exiles. A Russian story) によって重訳した小説。政治犯の嫌疑を受けてシベリア送りとなった栄豪 (Yégor) という青年が脱獄し、亡師の娘である那哲智 (Nadège) やフランス人の舞踏教師羅布利亜 (Lafleur) とともに、カムチャッカを経てアメリカへと逃亡してゆく物語である。

惜しくも下巻は刊行されなかったようだが、ロシアの鉱山労働の描写や帝政への意見、シベリアの叙景など、明治初中期のいわゆる政治小説の中でも群を抜いて面白い作品の一つである。栄豪を追跡する警官の耶阿麻狗 (Yermac) が栄豪の人徳に触れて苦悩するくだりなどは、ユゴー『レ・ミゼラブル』のジャン・バルジャンにも似る。訳者の鈴木天眼は福島県二本松の人。東京の「二六新報」や長崎の「東洋

日の出新聞」などで国粹主義の論陣を張り、長崎の衆議院議員となった。「補述」者の西村天囚とは親友で、ともに東海散士『佳人之奇遇』(明治18～21年)の制作に関わったことが知られている。(多田)

## 維新豪傑談 西村天囚著 菊判 1冊



『維新豪傑談』表紙

明治24年(1891)刊、本書は第3版。紹介される「維新豪傑」は、安政の大獄に死した梅田雲浜から開国を議した長井雅楽、志士にして歌人であった平野国臣、僧月照とその従者、憂国の公家姉小路公知、頼三樹三郎、そして木戸孝允とその従者。「維新」史をめぐる様々な視点を取りあつめた顔ぶれだが、いずれの章にも西郷をはじめとする薩摩人が顔を出すあたりが共通項だろうか。

各章に付された「好丈夫」「無頼漢」などの章題は漢文説話集を思わせるが、内容も単なる伝記というよりエピソード集、あるいは小説に近い。姉小路公知の亡霊が夜ごと都の鬼門にあらわれるという噂や月照の従者の談話など、関西とも関わりの深い天囚ならではのエピソードも入る。表紙は、表題を朱書した紙の裏に「雲を排き 手ずから妖蜚を掃はんと欲し／

失脚 墜ち来たる 江戸の城」とはじまる頼三樹三郎の漢詩が透けて見え、それを野犬がくわえているという意匠。豪快なタイトルとはうらはらに、この一冊には歴史の勝者と敗者の感覚が複雑に入りまじっているのである。(多田)

西村天囚 (1865-1924)

本名時彦、他の号に碩園とも。種子島で前田豊山に学び、上京後重野成斎(安齋)の邸に寄食し、島田篁村にも師事した。明治16年(1883)東京帝国大学古典講習科入学。「大阪朝日新聞」に入り、のちに主筆として「天声人語」欄を創設したことは有名。京都帝国大学文科大学講師、重建懷徳堂理事兼講師、島津家臨時編輯所編纂長、宮内省御用掛。(多田)

# 書道

がくひちようこせんじょうぶん  
岳飛弔古戰場文

慶応2年(1866)刊 折本 1冊38折 49.8cm × 16.0cm



『岳飛「弔古戰場文」』巻頭(右)と巻尾

し、古田徳次郎、山下藤左衛門が岳飛真蹟を模刻したという。この原本の岳飛真蹟および版木は、現在、尚古集成館に所蔵されている。また、岳飛真蹟に添付された山本正誼(1734-1808)「岳飛真蹟取しらべ覚」によれば、天明四年(1784)琉球が飢饉の時、薩摩藩士松岡政美が琉球の某家から岳飛真蹟を購入して薩摩藩に献上したという。杭州の岳王廟には清・光緒九年(1883)に刻された岳飛書「弔古戰場文」がある。両者は、岳飛真蹟および南宋末の宰相文天祥(1236-1283)の跋文を有するが字は全く異なる。本作の宋濂跋文は没後の年号を有し明らかな偽作で、文天祥の筆跡も疑わしい。(高津)

本拓本は、南宋の岳飛が、紹興十年(1140)、金の太子兀朮(完顔宗弼)率いる拐子馬(主力騎兵)を破った後に書写した、唐の文章家李華の代表作「弔古戰場文」を拓本としたものである。岳飛(1103-1142)は、字鵬舉、相州の人。南宋の名将で、対金講和派の宰相秦檜におとし入れられ、無実の罪で獄死し、のち、救国の英雄としてまつられた。慶応二年(1866)山田有裕の跋文によれば、慶応二年四月から八月にかけて鶴丸城内で、重久篤紀、郡山無隠(長か遠)、紀平右衛門(謙)の三名が監督

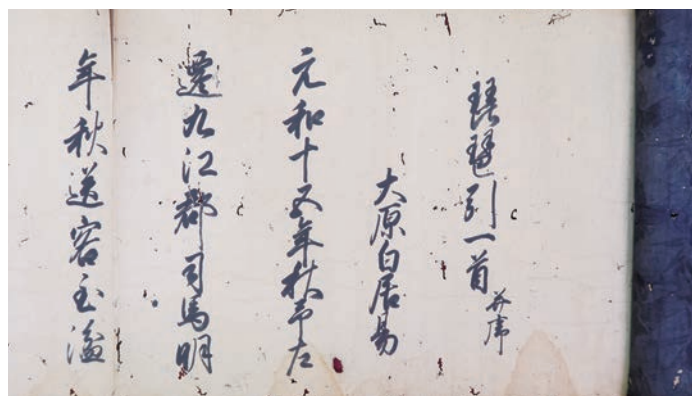
## 長崎義護書巻 卷子 1巻 38.5cm × 1073.2cm (木脇家文書)

長崎甚七義護(1766-1826)が書いた白居易「琵琶行」の書巻である。薩摩藩士木脇啓四郎(1817-1899)は、晩年、回想録『萬留』を著し、その中で江戸時代後期の薩摩藩の名筆家の筆跡はすべて購入したとして、山田弥一右衛門の「南都八景」、長崎甚七の「琵琶行」、亀山甚之丞「琵琶行」、福島新左衛門の「日新公伊呂波御詠」などを挙げているが、本書巻はそのうちのひとつ。巻末に長崎義護の奥書、木脇の前所蔵者のものと推定される「天保十年十月求之者也」の書き入れ、および木脇の書き入れがある。「琵琶行」は中国中唐の詩人白居易(楽天)の代表作で、江州に左遷された白居易が、舟の中で

落ちぶれた都長安の芸妓の琵琶を聞きながら自らの境遇とくらべるというもの。『古文真宝』にも収録され非常に流布した。

『薩州名家伝』巻四(書家)によれば、長崎甚七は京都の隠岐某を師として書を修業、島津齊宣の側役まで上り詰めた人物で、齊宣の書の相手を務めたとのことである。

江戸時代に最も主流であった御家流(尊円流、青蓮院流とも)の書である。(丹羽)



『長崎義護書巻』冒頭部



# 地図

## 錦江湾沿岸図（桜嶋近郊絵図） 1 舗 51.5cm×52.0cm

錦江湾を中心に沿岸部を描いた絵図で、鹿児島城（鶴丸城）前面の堤防（「汐受石カキ」）や山川の琉球船など航海に関係する情報を記す一方、鹿児島城下町の道路や街道筋を赤で着色するなど陸上交通の情報にも関心が払われている。また、各地の御牧には馬数も記す。

桜島の周囲には11の島を黄色で示し、6島に「新嶋」と記す。これらは、安永8年(1779)9月末に始まる噴火により出現した島々で、現在も桜島北東に新島（燃島）が残る。鹿児島城下町は図の右上部に描かれているものの、簡略的な描写に止まる。聖堂は安永2年(1773)に開設された孔子廟で藩校としての機能も有しており、天明6年(1786)に「造士館」へ改称している。加えて、「御館」の南隣の「御下屋敷」は、天明5年(1785)に藩主・

島津重豪が二之丸を整備し、二之丸御門を矢来御門（現県立図書館正門付近）、御下屋敷門を二之丸御門（現市立美術館正門付近）へ改めていることから、整備以前の景観を本図は示している。（小林）



「錦江湾沿岸図」(全体)

## 朝鮮国之図（高麗国之図） 文化9年(1812)写 7枚（一枚物を7分割）（木脇家文書）



「朝鮮国之図」(全体)

本図は、識語によれば、文化9年(1812)夏に薩摩藩士の木脇祐長が大迫新蔵所蔵本を山川の郷士丸山長州という人物に依頼して写させたもので、祐長没後の文政6年(1823)に兄の祐住が裏打ち補修を施している。本地図は薩摩藩初代藩主島津忠恒（家久）の家老であった川上將監久国が朝鮮で作図したとされる古地図（実際は父の久辰が作図したものらしい。鹿児島県立図書館蔵）の転写本の一つで、河川を大きく描写する一方で朝鮮半島北部は実際よりも狭く描画し、鬱陵島の西側に于山島を配置する等、李朝時代前期の朝鮮地図の影響を強く受けている。漢字表記された朝鮮地名に記された片仮名表記は当時の朝鮮語音を表記しようと試みたものであるが、誤りが少なくない。

木脇祐長(1762-1818)は通称仁平次。薩摩藩の文化官僚として幕末明治期に活躍した木脇啓四郎祐尚の父で、横目(目付)として天草辺唐物取締を8回、江戸詰を12回、島方を3回勤めた有能な官僚であった。(内山)



令和元年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開  
新中央図書館オープン 25 周年記念  
「平成」新収 未公開貴重書展

【編 者】丹羽謙治（法文学系教授）

【執筆者】高津 孝（法文学系教授）

日隈正守（教育学系教授）

丹羽謙治（法文学系教授）

内山 弘（法文学系教授）

金井静香（法文学系教授）

亀井 森（教育学系准教授）

佐藤宏之（教育学系准教授）

大淵貴之（教育学系准教授）

小林善仁（法文学系准教授）

多田蔵人（法文学系准教授）

【発 行】鹿児島大学附属図書館

〒 890-0065 鹿児島市郡元 1 丁目 21 - 35

<https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/>

☎ 099 (285) 7460

【発行日】令和元年（2019）11 月 7 日

【印 刷】（株）鹿児島新生社印刷

**フェスタ**  
国立大学2019



頁	修正箇所	誤	正
表紙裏	目次	薩 <u>摩</u> 朝鮮軍記	薩 <u>藩</u> 朝鮮軍記
p4	本文1行目	薩 <u>摩</u> 朝鮮軍記	薩 <u>藩</u> 朝鮮軍記
p4	上の図版のキャプション	薩 <u>摩</u> 朝鮮軍記	薩 <u>藩</u> 朝鮮軍記